

◎張孟声の祭文「唯以忘却的人生百味」

(『尚旭東生誕九八年忌墓前祭』、1998年の年初、東京八王子市高尾山にて)

尚旭東先生、あなたと上海で結婚したのは、一九四〇年十一月のことでした。なした男の子に明朗(小日向明朗)という名をつけてくださいましたね。

思いかえせば、一九四五年の終戦直後、あなたは無錫のわたしの実家に隠棲し、日中は農夫たちと農作業に精を出し、夜はランプを灯して明朗に教え、ときには近所の人たちと膝を交えて語りあい、すっかり地元にとけこんでいました。

ですが、それもほんのつかの間のこと。あなたは戦犯容疑で国民党政府の憲兵に連行され、南京の監獄に拘留されました。ひとりになってしまったわたしは、微々たる力をふりしぼり、勇気を奮い起こし、前に向かって進むしかありませんでした。

それから二年のあいだ、伝手をたよっての日々、北京や上海をめぐり、ただただ尚旭東救出のために奔走したのです。そして、ああ、ついに何応欽將軍(国民党)の助けにすがることがかない、裁判所に親筆の書簡を送っていただけたのです。なんという幸運でしたでしょう。そのお陰もあって、あなたは無罪放免となり、無錫の田舎へ戻ったあなたとまたいっしょに暮らすことができました。とても幸せな日々でした。明朗のためにも、そんな境遇がずっとつづくことを願っていました。でも、その幸せのなんと短いことだったでしょうか。

四九年の晩秋、あなたは追われて単身中国を去っていきました。

金銭に執着しないあなたは私財を蓄えることを潔しとせず、信義と道義を重んじ、除暴安良を旨とする日々のなか、交友関係は中国全土におよび、あらゆる階層の人たちと接触をもち、ただ自身の信念のためだけに行動するという生き方を貫かれたように思います。

あなたは、まさに中国大陸を駆け抜けていかれたのです。思えば、わが家にはまったく蓄えというものがありませんでした。一九四八年にあなたが戻ってきたとき、わたしはすぐに女工を辞めて故郷に帰り、実家の家族と一緒に暮らしました。わたしには、村々の小学校をまわって子供たちを教える得るほんのわずかばかりの給金しかなく、やっとの思いで生活を維持しました。ほんとうに精一杯の毎日でしたね。でも、あなたはいつも笑いを振りまいてくれました。その心優しさに、どんなにか感謝したことでしょう。

あなたが中国大陸を去った一九五〇年、わたしは西南鉄道局の小学校教師に応募し、試験に合格すると湖南衡陽鉄道第一小学校に配属され、その後すぐに広西省柳州鐵路小学校に転勤となりました。幼い明朗を連れ、数千里も離れた異境で生きていかねばならなかったのです。一人とて知り合いもなく、切なさや愚痴に耳をかしてくれる相手さえいない暮らしがわたしを待っていました。それでも胸を張り、上を向き、ひたすら教学に励み、明朗を健康に立派に成人させることだけに専念しました。

そんな暮らしのわたしたちに、またも悲劇が襲ってきました。解放後の政策が激変し、政治闘争が苛烈になっていくにつれ、尚旭東の大陸での活動の性質が特殊で複雑だったことや、わたしたちが「異民族結婚」ということもあって、攻撃の矛先は日々激しく、ついに離婚するよう迫られました。しかも、明朗まで巻き添えにされてしまったのです。一九五九年、国内有数の大学である清華大学に合格したものの、政治審査に引っかかり、やむなく進学をあきらめ、世間を放浪するほかなくなってしまうしました。

やがて「文化大革命」という政治の嵐が中国全土で巻き起こりました。わたしと明朗が受けた苦しみは、まるで鉄板の上で焼かれるようにますます酷烈となり、明朗はどうとう八か月間も投獄されてしまいました。わたしもまた学校を追放され、工場で厳しい労働に従事させられるようになりました。物質的にも精神的にも耐え難い、こんな地獄のような日々が十年もつづいたのです。もし、明朗の母に対する優しい思いやりがなかったら、もし前途にかすかな希望がなかったら、わたしはとっくに自分の人生にけりをつけていたことでしょう。

明朗とて、もし、わたしがいなかったら、こんなに強く成長することはなかったでしょう。長く苛酷な風雪のあと、新たな社会主義が訪れようとしていました。世の中を正しい姿に戻してくれたのは鄧小平先生でした。わたしたちは特別感謝しなければならないでしょう。

なぜなら白が黒、黒が白とされる善悪逆転の、まさに崩壊に瀕していた国家民族を、林彪と四人組の魔の手から救い出してくれたのですから。

一九七九年七月、わたしの名誉は回復されました。ふたたび学校に戻ることができました。

そして一九八五年四月に退職するまで教鞭を執りつづけることができました。明朗は早くから政治的迫害を受け、思うように職を得ることができず、その収入たるや微々たるものでした。なんとか援助したいと思っても、心はやれど力及ばず、退職金とて数えるほどで、心はただただ痛むばかりだったのです。

尚旭東先生と生前親しくして下さった方々が、明朗を力強く支援し、助けてくださったので、いま孫たちの未来にはたしかなものがあります。わたしは、このみなさんのご恩に感謝しても感謝しつくせない気持ちでいっぱいです。わたしは今日、幸運にも来日でき、あなたの墓前祭に参加することができました。あなたとこうして再び会えるとは、望外の喜びというしかありません。いま、わたしは涙にくれながら来し方を報告しています。これがわたしの生涯最大の願いだったのです。流すまいと思っても、涙がとめどなく頬を濡らします。

つらく長かったわたしの人生も、間もなく幕をおろすでしょう。そんないま、心から望むのは、子や孫たちが一生懸命努力し、小日向家を代々しっかりと盛り上げて繁栄させ、日中両国民の友好に貢献してもらいたいということです。

けっして忘れ去ることのできない人生も、もう過去のものとなりました。いまは前途に光

明を感じ、この上もない喜びと安らぎを感じています。泉下のあなたも、きっと微笑んでくださっていることでしょうね。

張孟声